市川市八幡「この地の歴史と見どころ」（「この地の形成と特色」と「昔の風景」は表面参照）

【この地の歴史】

●奈良時代、宝亀 2 (771) 年

市川砂州上の道が「東海道」（今の国道 14 号）に設定されて武蔵国との官道になりました（それまでは相模国の三浦半島走水と上総国富津を結ぶ海路が東海道）。

平安時代の寛仁 4 (1020) 年に『更級日記』の作者菅原孝標女は、上総の国司だった父に帯同して、この道を通って「まつさとの渡し」（松戸に比定。松の里＝市川の説もある）から武蔵国に渡り、上京しています。

●奈良時代、寛平(889 ～ 898) 年間

諸国に創建された国分寺に代わる総鎮守として下総国では葛飾八幡宮が宇多天皇の勅願で勧請され、以降、この地は「八幡庄」として石清水八幡宮の荘園になりました。

神仏習合思想の広まりで、葛飾八幡宮にも神社を管理する別当寺の法漸寺が存在しました。明治維新後の廃仏毀釈により廃寺になりましたが、鐘撞堂、随神門（元は仁王門）は、その名残です。自治会名に「宮」でなく「門前」が付くのも、この為です。

八幡 5 丁目には旧字（集落）名として「後土」「合戸」があり、市川学園幼稚園前の通りには後土川が流れていました。神社に奉仕する人々が居住した「神戸」（こうべ、こうど、かんべ）と関係すると考えられます。

●平安時代から鎌倉時代、治承 4 (1180) 年

石橋山で敗れた源頼朝は安房に逃れ、千葉常胤を中心とする下総武士団の援軍を得て再度進軍します。『源平闘諍録』（建武 4(1337) 年刊）に「右兵衛佐（頼朝）七千余騎の兵を帯して、結城の浜（千葉市寒川町付近）より八幡の社頭に馳せ入り、下馬有って、願書を奉りにけり。八幡の原（八幡 3 丁目の旧字名は大芝原）を打ち過ぐれば…」とあり、この後、真間の継橋を渡り、下総府中に入って諸国の武士に加勢を呼びかけました。

頼朝は幕府創設後、千葉常胤に命じて社殿を修復しています。なお八幡宮には頼朝公が立ち寄った時の「駒どめ石」が残っています。

●鎌倉時代、元亨元 (1321) 年

八幡宮に保管されている「元亨の梵鐘」は、寛政 5 (1793) 年に境内で倒れた古木の根元から偶然に発掘されたものです。銘文には神社創建から源頼朝までのことと併せて当時の周辺の状況が刻されています。

●室町時代の中期から戦国時代

関東の統治者鎌倉公方と、その補佐関東管領の争いに端を発して「享徳の乱」（享徳 3 (1455) ～文明 14 (1483) 年）が断続的に 28 年間続き、この頃に「元亨の梵鐘」は略奪を恐れて、地中に埋められたと想像されます。その後は小田原北条氏と安房里見氏の争いの後に北条氏支配下になりましたが、北条氏滅亡後に徳川家康が関東に移封され、天正 19(1591) 年に八幡宮は家康から五十二石の朱印地を賜りました。

●江戸時代

日光街道の脇往還として千住で水戸佐倉道が分岐し、新宿（葛飾区）で更に分かれた佐倉道の宿場として「八幡宿」（市川市役所辺りで街道を挟んで上町と下町）が設けられます。北への木下街道、南への行徳街道がクランク状に交わる地であり、江戸時代後期から神社の例大祭時の「市」が賑わいました。

【農具市 (ボロ市)】

『葛飾記』（寛延 2(1749) 年刊）には、夥しい店が諸国から集まり、生姜市とも呼ばれ、貴賤の群衆が集まる、『葛飾誌略』（文化 7(1810) 年刊）には「国中第一の大市」と誌され、大正 12 (1923) 年の『千葉県東葛飾郡誌』には付近の十数里から老若男女が押し出し、買う人は毎日数万になるとの記載があり、この頃に「関東の三大農具市」（昭和 5 年の調査では 923 店の出店）と謳われるようになり、近年まで賑わっていました。

『昭和36年市川市八幡神社　農具市』
（山﨑美喜男…写真、山﨑秀雄…解説）より

●江戸時代、明和～寛政頃（18 世紀後半）

市川砂州は砂地で穀物栽培には適さずに、住民は苦労していましたが、この地で生まれた川上善六が、同じく砂地の東美濃地方で盛んだった梨栽培の技術を持ち帰り、ここ八幡宮境内で栽培に成功し、その技術を村人に教えた結果、「八幡の梨」は名産として、江戸の住民に大いに喜ばれました。

【この地の見どころ】

◎千本公孫樹…国指定天然記念物

多くの樹幹や枝や幹から垂れるような枝である乳柱（気根）が密で、樹齢 1200 年と伝わる奇樹です。『江戸名所図会』（天保年間刊）にも洞に多くの蛇が生息し、白蛇を見ると長寿を得るとの伝承が記されております。

この木の威容に感動した伊藤左千夫（歌人、小説は『野菊の墓』が有名）は、こう詠んでいます。「一本ゆ 五百千幹立つ銀杏木の ゆゆし たふとし 神の御社」（一本から五百、千の幹が出ているイチョウの、神聖で畏れおおい、尊い神社）

千本公孫樹を写した絵葉書
大正 8 (1919)年頃
市川歴史博物館蔵

◎「八幡の藪知らず」

「八幡不知森」は「禁足地」です。この理由として、日本武尊や平将門などに因む伝説から、行徳村の入会地説などが、各種古書に記されておりますが真相は不明です。水戸黄門がここで八幡大神様から咎められる話が歌舞伎演目になり、人気を博し、広く知られるようになりました。

『広辞苑』にも「八幡の不知藪」として「ここに入れば再び出ることができぬとか、祟りがあるとかいわれる。転じて、出口のわからないこと、迷うことなどにたとえる」と語釈が掲載されております。

『江戸名所図会』には二十歩四方（36 ㍍四方）程度の記述がありますが、今は狭くなっています。昔は雑木林ですが、竹に侵食されています。

八幡の藪知らず　塚本里乃氏蔵
明治末期～大正初期頃

この当時、不知八幡森の石碑の横には茶屋が設けてあり、飲み物を販売していたとみられる。

八幡門前自治会　編集・設立　令和６(２０２４)年８月